

第3回静岡市文化財保存活用地域計画策定懇話会 記録

[日時] 令和6年1月11日(木) 10:00~12:00

[会場] 静岡市役所本館4階 44会議室

[出席者]

委員：中村座長、落合座長代理、篠原、松下、池田、中村、田宮、菊池

事務局：岡村局次長、岩田理事、石川課長補佐、森山、杉山、熊谷、小泉、毛利、山田、渡邊

TIT：池田、安部

1 開会

事務局(司会)：ただいまから懇話会を始めます。お忙しい中、ご出席ありがとうございます。本日の出席人数は8名で、実施要領第6条2項に示す過半数に達していますので、成立いたします。会議は公開となっていますので、ご承知おきください。委託業者であるTITも出席しています。

2 静岡市文化財保存活用地域計画についての事務連絡

(1) 計画策定スケジュールについて

事務局：(資料2説明)

3 懇話事項

事務局(司会)：実施要領第5条2項に従い、進行は座長にお願いします。

座長：明けましておめでとうございます。本日、みなさんに無事にお揃いいただいた。寒いですが、風邪にまけずにがんばっていきたい。懇話事項(1)の前回議事録について、事務局より説明をお願いします。

(1) 前回議事録の確認と対応状況の説明

事務局：(資料3-1説明)

座長：ありがとうございました。ただいまの説明について、議事録も添付しておりますので、お気づきの点、足りない点などありましたらご意見をお願いしたい。素材が膨大なので大変だと思う。文言の修正、抜けているところなどあればお願いしたい。特にないようであれば先にいきたい。気が付いたことは、随時、発言をお願いしたい。

(2) 第3章「静岡市の歴史文化の特徴」について

事務局：(資料4説明)

中村座長：ありがとうございました。説明をいただいたが、項目もたくさんあるし、内容もお互いに絡み合っており、かみ砕くのが難しかと思うが、ご意見等頂ければと思う。

菊池：歴史文化の特徴でまとめるべきものは、第1、2章で示した静岡市の歴史の特徴、文化財の特徴を勘案して、静岡市の歴史文化はここが売りだということをもとめる。「中心地」だということは静岡市ならではの特征として、非常にわかりやすいと思う。市民に対するPRにもなる。冒頭で11の項目を出しているが、トピックとなるキーワードがまとめられており、ここから発展させると良いと思う。近世の街道の往来については、人が動くのは、陸の道だけでなく、清水港も含めて、海の道ということにもつながってくると思う。

中村座長：歴史博物館で清水を中心とした企画展示を行う。交通のハブとして、多機能な機能を持った地域ということで展示を組み立てたので、見ていただきたい。捉え方として、個々ではなく、トータルでどんな状況にあるのか、まとまりがあるのかが、うまく説明できるとわかりやすくなる。

篠原：時代ごとではないよう検討していくという説明はその通りと思った。現状、時代ごとにばらばらになっているが、古代に安倍郡、有度郡、庵原郡ができるが、その前に、川、地形的な基盤があって、社会ができあがり、三つの郡ができあがった。それがずっと続いていく。近現代になって新しい地勢ができあがるが、合併した後に、葵区、駿河区、清水区となっている。形態的な基盤はつながっており、そういうところを意識して書く方が良いのではないか。そういう意味では、経済的な部分が抜けているのではないかと思う。つながりを考えて書いていくと、特徴が出て来るのではないか。

座長：考古学の知見では、古墳の分布図から、権力が、庵原郡から安倍郡に移っていくのかわかるかもしれないというのがあった。

篠原：新しい古墳も最近になって見つかり、移り変わって来る部分もあるが、庵原郡、有度郡、安倍郡、それぞれに大きな経済があって、経済的な分布がみえるのがわかってきた。

菊池：以前は、庵原郡の方が勢力が強く、安倍郡などに移っていったと言われていたが、もともと、三郡それぞれに勢力があって、前期では庵原郡が大きかったなど、バランスが時期により違うという見方に変わってきた。三つの郡にわかれる前からそれぞれに権力基盤があったのではないか。

落合：静岡市は、南北に長い。そこに安倍川、藁科川があって、川筋に海から人が上がって行った。川筋の文化が非常にあるのではないか。川筋に白髭神社が多い。古い神社としては、延喜式内社が全国に4,000くらいあり、駿河国には結構あると思う。伊豆の国は極端に多く、火山の噴火と関係して古い神社ができていく。延喜式内社の拠点をみていると、平安時代の文化の中心もわかると思う。白髭神社がどうなったのかもヒントになる。川筋の文化、山の文化、海の文化、があって、衣食住の文化が発展したのではないかと考えている。

座長：静岡市域全体をどう捉えるのかという説明が必要であると思う。

池田：歴史文化の特徴とは、地形・地質、政治の中心、交通の要衝などであると思うが、各項目の最初に、例えば特徴1は、「川が作り出した」とあるが、安倍川によってどうなっ

たかなどの記述がない、そういう説明を、それぞれに入れ込んでどうか。特徴2は、政治の中心になりえた事実というか必然性があると思う。また特徴4では、交通の要衝になりえた必然など。特徴5では、南北の街道がテーマであるが、説明で久能街道にふれているが、主要文化財に久能街道が入っていない、文章で取り上げるのであれば、表に入れるというような一貫性があった方がよい。特徴7では、清水港の記述があるが、国際貿易港になったことも押さえる必要があるのではないか。特徴9のオクシズの盆踊や神楽なども、村落に至る道が分かれていて、急峻な地形で、独自の文化が発展したなど、どのような理由かは分かりませんが、なぜ盆踊や神楽が誕生したかというような背景。特徴10では、さくらえびのことが書かれているが、水深2,500mの駿河湾があってこそのさくらえびなので、その辺の記述があった方がよいのではないか。また、特徴の2と3と6は、重複している記述があるが、括れるのであれば括った方がよいと思う。統一感を持たせることと、トピックなどをきちんと記述に入れ込むことをお願いしたい。

中村：人は、水なければ生活ができない。そういう意味では、最初に安倍川の流れて静岡市ができたのではと思う。現在の安倍川は整備されているが、安西、安島という地名がある。静岡市は、登呂遺跡などからはじまっている。そこから発展しながらいま駿河、清水、蒲原などがあると思う。そこを位置づけながら、1、3、6をうまくつなげられるよう、全体を考えられればよい。

田宮：文化財は知らない人、興味のない人もいるが、いつの時代のこういうものだと単体で説明するが、昔から流れがあって、こういう流れの中でこういうものができて、価値がある文化財として残っていると、静岡市の流れを川、山、港を含めてまとめる、とみんなにわかりやすい。歴史の昔のテレビ、ドラマは盛んなので、興味を持っている人も多い。何もない時代から、今の時代になるのはこういうものがあった、その価値を知らせていくと、一般人にとってわかりやすいのではないかと感じている。

落合：古い文化の広がりから考えると、人々は海づたいに移動して、川づたいに山を上っていく。山の上から海辺に伝わっていくのではなく、海から川、山へ伝わっていく。古くは安曇族という人たちがいて、長野県の安曇野を作っている。住吉神社も津守氏の関係だし、山の中にも海に関係する名前が残っている、食文化も、山の中でサメを食べる文化が残っている。川沿いに文化がのぼっていった。清水にいろいろな人が入ってきて、安倍川沿いに上ったのではないかと考えている。水がないと生きていけない。安倍川は水がたくさんある。文化の基礎になるのは、そういうところではないか。

松下：第3章のまとめ方については、県の指導もあって、特徴を活かそうということだと思うが、時代ごとにややバラバラな印象を与えてしまっている。静岡市域は山・川・海に面しており気候も温暖であったため、様々な産業が発達し、多くの人に住んだ。そのため政治の中心にもなった。このように地理的な特徴と社会的な環境は関連していることから、そうした大きなながれを示せればよいのではないかと思う。

座長：ここにとりあげる前に、この地域全体をどうとらえるかが見えてきた。個人的な思い

付きだが、静岡、清水をあわせた形で、独特の気風をつくりあげ、独立王国を構成していたのではなか。北は南アルプス、西は峠がいくつあって、山並みが連なり外敵から守られてきた。東は薩埵峠だけが唯一の抜け道。薩埵峠から、宇津ノ谷峠までで東西を分断し、独自の空間が形成されている。気温も温暖で、南には海があるので、いろいろなものが入ってくる。その中には、蒲原王国などが分裂して特徴を持った地域がでてくる。静岡をアピールするには夢のあるアピールポイントを出し、そこに位置付けることで立体化する。温暖な静岡王国、自立性を持って独特の気風を持っている。静岡は物価が高いが、ねぎらないと言われている。やさしい心がホスピタリティにもつながっている。地域文化をアピールする時に、あれもこれもではなく、トータルでうまく表現できるようなことができれば、全国的にも特徴ある性格が出て来るのではないか。みなさんにアピールできるような特徴を打ち出すことができれば、文化財もアピールできる。

篠原：静岡市の成り立ちは、地形も特徴だが、縄文時代、平野は海だった。弥生時代に移り変わるまで、平野全体が海。縄文時代から寒くなって、安倍川が土砂を運んで、うまい具合に扇状地をつくった。平野ができあがったら、たまたまだが、米を作るための環境をつくり、登呂遺跡より前から農耕集落がかなりたくさんあった。そういう環境は、どこにでもあるのではなく、静岡市は奇跡的に条件がそろった。登呂遺跡は一般的な米作りの集落だが、一方で、奇跡的に良い条件が揃った村むらと言うこともできる。それをベースに、米作りの豊かな環境が弥生時代からできあがった。登呂遺跡は一般的な普通の村と言われてきたが、逆に、静岡で米作りがさかえた証拠、他の地域とは異なる。

座長：いろいろ発展の方向性が見えて来る。

落合：地形的に他とは違う。山に囲まれ、海があって、平野ができた。他にない地形なので、他と違った文化があったと思う。今でもそうだが、静岡市は、他と違って気温が一年中変わらない。安倍川の水はきれい。昔から飲み物として環境的に悪い水ではなかったと思う。集落として集まった。その恩恵が今でもある。静岡は水から発展したまち。起源として安倍川の水は大きいのではないかと思う。

座長：静岡市は清流のまちというキャッチフレーズだった。

事務局：わかりにくいということで、環境創造課という名前が変わった。

座長：水路にヤマメを放したら死んでしまったという新聞記事をみた。担当者は見てもらうだけで意味があるということだった。静岡市にとっての水はすごい意味がある。巴川も安倍川の支流。

落合：文化財について、無形が275とあるが、無形文化財は神様、仏様と、ご先祖様とのつながりを表現したのが基本ではないか。盆踊り、神社の奉納神楽など、275あるのは、神社の広がり、仏教の広がりも大きいと思う。仏教の市内の宗派の分布によって、どのように仏教が広がってきたか。仏教の信仰もわかる。神楽は、神様と民衆の関わりを表す。宗教の分布と民俗芸能は非常に関わりがあると思う。文化財として注目しているのは、坂ノ上の仏像群。県指定だが、古代から10数体ある。ほとんどの人が知らない。山の方

に優れた仏像があったということで、ある程度の寺院があった。そういったものも貴重な文化財として位置付ければ山に人を誘うきっかけにもなる。

篠原：街道の発展に関して、東海道は東海道でまとまっていて、中部とのつながりはないと思ったら次のところに入っている。静岡市は交差するのが特徴。④、⑤が別々になっているが、一緒にした方が、特徴が表せるのではないか。

(3) 第8章「静岡市文化財保存活用区域」について

事務局：(資料説明)

座長：具体的な話がでてきた。区域設定について、なんでも結構なので意見をお願いします。

落合：静岡市は南北に長いのに、区域が東西に偏っている。藁科川の上流あたりも入って良いのではないか。特に梅島のあたりはおもしろいお祭りもある。

座長：地域的に見直すことはあるのではという意見だが。

田宮：静岡市は広いので、すべてをいっぺんにということにはいかないと思うが、区域1～4は清水に偏っているという印象がある。梅ヶ島も入れるなど、薄めた方が良いのでは。

落合：藁科川は聖一國師誕生の栢沢あたりも福岡の関係者が毎年やってきている。祭りのたびに、水を汲んでいく。そこに管崎宮の祠が祀られている。今後それをきちんとした建物にするという話を聞いた。八幡神社の由緒と言われた。聖一國師は、福岡や長崎の人たちは良く知っている。静岡市でも、もうすこしPRした方がよい。

中村：結構文化財がのこっている、枝垂れ桜を見に行ったりする。知られざるオクシズということでしたPRすると良い。

松下：文化財をその周辺を含めて区域設定をすることで面的に保存活用を行い、魅力的な空間の創出をめざすとあるが、ここで区域設定をすることのメリットを確認しておきたい。

事務局：業務の担当の目線からすると、蒲原地区については、区域を東海道の道と建物に設定し、管理者、所有者が保存・活用に前向きな姿勢なので、活動を後押しするには重要と思っている、区域を設定することで、区域の具体的な課題、方針、措置をうちだすことができる。主体が行政、所有者、民間に限らず、後押しできるメリットがある。市の中で、今後、施策や事業を区域に投入することを検討できる。

事務局(岩田理事)：補助金が出るなどではないが、区域を明らかにすることによって、やるのであればここでやろう、これをやるのならこの地域やってみようなど、他の政策を呼び込んでくる意味がある。民間のエネルギーをそこに向けるという戦略的な意味もある。

田宮：蒲原については、地域住民、民間の意識がすごく強い。今でも一つの町という傾向がある。とくに旧東海道の文化的なものが残っている。

座長：地域設定をするには、地域内に住んでいるみなさんが自主的に活動するということか？

事務局：最終的にそうなっていくとありがたい。

座長：蒲原は広くなく、文化財も多いのでやりやすい地区。どこでもできるかというとなし
い。オクシズは住んでいるみなさんがそういった気持ちを持っているかがキーになる。

組織づくりから進めると大変。すごいから、みなさんで考えろということになるか

事務局：計画に書く措置は、静岡市の4次総合計画の計画期間である令和12年までに実効
性をもたせる。区域の設定は任意であり、無理にたくさんやって、できなかったという
のは実効性がなかったということになる。どこまでが現実的かをまず内部で考える。打
ち出すには住民の合意を図るが、中山間部では、そこまでやるのは難しいと思っている。

中村：4次総の中でやれるのが、この4つに絞られた、市の方針が示されたということか。

事務局：あくまで案の状態。みなさんのご意見を踏まえて、変更することは考えられる。

事務局（岡村局次長）：事務局でも十分に揉めていない。区域をどう捉えるか、事務方と私
の意見も違っている。第3章で静岡市の特徴を導きだそうとした。静岡市の特徴がずっ
と続くように、計画を活用して取り組んでいく。ここにある4つの区域は、特徴のある
文化財が集積している場所ということは理解している。落合宮司が言われたように、山、
川も特徴だと言っていたのにも関わらず、そういう部分が区域としてないのはどうか。
そうしたところを残していくために、中村先生に言っていただいたように、そこにいる
人たちに考えろということではなく、市として、このエリアは市として特徴的なのでぜ
ひ守っていきましょうというのを伝える、それに地域の人たちにも乗ってもらおうとい
う流れも大事だと思う。このエリアは良いが、区域を、特徴と集積の具合をまとめるなか
で、区域をつくってまで十分に人も取組もないが、こういう取組をしていきましょうと
いうことを示す場所と、現在、進んでいるので、他のところのお手本になるような場所
として打ち出す。二つの区域が必要ではないか。松下委員がいったように、市として残
さなければいけないのなら、補助金を出さなければいけない。そうしたバイブルになれ
ば良いと思っている。手本になる区域、残していくために市が示してあげる区域。事務
局のなかで議論している。

事務局：メリットの話があつたが、市の補助金だけでなく、国の補助金も考えられる。文
化庁の地域文化財総合活用推進事業は、文化財の所有者や実行委員会を対象とするもの。
作成した計画にもとづくことで、ユニークベニューなどにも補助が出る。計画に位置づ
けることによって、国の補助金下補助率が上がるといったメリットもある。

座長：補助金が出たとしても、活かす人がいるのか。問題意識をもって補助金をもらえるか
がポイント。

落合：神楽をずっとやっていたが、やりたい人がいなくなってきたというところがある。
装束が痛んでいて、新調していくならば、できそうだという場合もある。応援するため
にはお金の力が大きい。文化財関係だけでなく、観光庁が持っている予算も使える。こ
ういう予算も使える可能性がある、そういうものがあると計画が生きてくる。一時期、
観光庁の予算が倍くらいに増えた。その時は、長官もびっくりしていて、トイレをつく
る、看板をつくるなどあれば出せるということであった。観光資源として出していくと

いう予算もある。文化財の保存、修理の予算は、補正の一般会計で2割減といわれた。去年は45億を補正でとってもらった。今年は、満額を補正でとってもらった。文化庁に新年のあいさつにいった際には、配分はわからないが、翌年も使えるとのことだった。課長以下みんな会議で、能登の対策をしていた。そういう状態なので、来年、再来年は震災の関係で増えるかはわからないが、国の予算をどうやって計画のとりこめるかは大きな意義となる

事務局（岡村局次長）：実行力のない計画を作ってもあまり意味がない。実行力に結びつく形にしなければいけない。観光庁、文化庁の補助金、市もどうしてこれが大事なのかを示すものがなく、担当者が財政の担当に折衝して予算をとっていた状況があった。この計画で体系的に説明することで予算を取りやすくなることはある。

松下：中山間部でも聖一国師の生まれた葵区栃沢を中心に、静岡商工会議所が事務局となり、市議や農協の皆さんなどと一緒に聖一国師顕彰会という組織的な活動が展開されている。福岡や京都との連携事業でもあり、ぜひ区域設定について検討いただきたい。

落合：民間に同補助金を出していけるのか。市で枠組み、マニュアルをつくって、予算を出してもらえると。

座長：地域おこし協力隊はどの位いるのか？ どういうところに派遣されているのか？

事務局（岡村局次長）：採用すると国からお金が入って来る。いろいろところで活用しようというのが市の方針。今まで多かったのは中山間、漁業などだが、今はもっといろんなところで活動している。

座長：思い付きだが、よそから移り住んだ人がすごいなといったことが、地域の活性化のきっかけになり、町の発展、まちづくりに貢献した。滋賀県彦根市が活性化したのは、お祭りや地場産業に関心があって、自分もやってみたいという人材をエリアに送り込むことで、地域の人と協力しあいながら発展していった。よそから評価されるのは地域の人にとってありがたい。文化財だけでなく、人間を、市全体の施策の軸に埋め込んでいくことも考えたらよいのでは。大学で民俗学を勉強していたが就職がない人がいっぱいいる。そういった人材を地域に派遣してはどうか。若い人がきてくれるのはありがたい。

事務局（岡村局次長）：実際は難しいところもあり、局として募集したが応募なかったものもある。今までやっていた以外でも手を上げるというのがある。検討していきたい。

中村：保存、活用というのは継続を考えると何か。何億というお金をもらっても、最初のお金であり、指定されれば継続しなければいけなくて、その予算は指定された人が全部背負うのか？

落合：国の場合、保存のための修理、国で6割。残りを県、市、所有者で1/3ずつとなる。県、市でお金がないと所有者が負担するので、できるだけ国の予算を増やすのが私の仕事になっている。原則、保存、修理、収蔵庫、防犯、防災まで国はお金をだしてくれる。材料を確保する。左官屋さんの小手などの道具もいる。技術者の養成、研修会にも出してもらおう。そういったものの総額として予算がついている。国の予算は、半分は税金、

半分は借金。本来なら難しいが、なんとかしよう、国土発展のために税収をふやす、インバウンドをよび込む。そのために資本投入し、国宝・重要文化財が人を呼び込む。

中村：保存のためには持ち主の負担があつて、実際には継続するが、継続してもらえないものではない。

落合：いつ減らされるかわからない不安定な予算ではある。

中村：心配なのは、蒲原地区で市民が通り沿いをまちづくりの一環としてやっているが、高齢化など、保存の人たちが気持ち良く働ける期間は良いが、それが過ぎるとどうなるのか？指定されるとずっと指定で、解除されることはない。

落合：火災でなくなってしまうと解除されるが、国宝を解除ということはないと思うが。

事務局：人より文化財の方が寿命が長い。そのかわり、人の力がないと文化財がいかせない。

蒲原地区は移住してくる若い人がいて、まちづくりに関わっている。長いスパンのなかで、サイクルを形成できそうと考えている。モデルケースとしての地区。ものはあるが人はいない地区の設定というのも考えたが、人が文化財を守って、活かすのをうまくやっているところは、楽しみながらやっている。行政がこれは大事だからと価値付けだけだと押し付けになってしまう。人がいなくなって文化財が朽ちていくのを、無理やりお金を投入して延命措置をしようとしても、文化財保護法の上で守られているだけで、本当の意味での保存活用にはならない。

(4) 計画を地域住民等にわかりやすく伝える方法について

座長：非常に難しい所だが、だいぶ時間もせまってきたので、(4) 分かりやすく伝える方法についての説明をいただき、その後、また、やり取りを継続するというにしたい。

事務局：私自身が楽しんでこの計画をつくらないと、課内でも実効性のある計画にならない。課が楽しんで局に伝えて、財政に説明し、市長に伝わり面白いとなって初めて実行される。一方で、所有者、管理団体、市民にも同じことが当てはまる。序章に目的を書いたり、区域設定をしたり、いろいろなところに要素を散りばめていくが、どこで打ち出すと響くのか。書くのは簡単だが、誰が責任を持って守るのか？一端を担うのは行政だが、所有者や住民のみなさんにも主体で関わってもらわなければならない。未来志向の考え方としたい。

座長：一通り予定して事項について説明をいただいた。全般的にでも意見をもらいたい。

菊池：地区設定の考え方について、文化庁がこの制度を設けた時には、静岡市のような巨大な市を想定していないのではないかと。文化財に限られた範囲にまとめ、文化財行政は文化財を守るが、文化財行政だけでなく、都市行政は無電柱化やまちなみ整備、産業育成ということで地域おこし協力隊、物産、お土産など観光や商工を巻き込んで取り組んで整理すると、わかりやすくなると思う。ただし、はずれたエリアを説明する必要がある。わかりやすく伝えるということに関して、読む人はどの程度を想定するか、事務局

として方針を持って進められればと思う。中学生、高校生が理解できる内容としている市町は多い。中村先生も夢のあるプランにという話をされていたが、文化庁の研修会で有識者が、市民に押し付けるのではなく、夢になる、みんなの計画にしないと意味がないということ言っていた。担当者は周りから色々言われて夢を見出すのはなかなか難しいかもしれないが、まわりの人がフォローし、うまくやって欲しい。補助金については、事務局から説明のあった地域資源を生かした総合的活用は、文化庁で多くのメニューをもっている、デジ田交付金も地域計画をつくることで枠が増えるというのもあるので、それをアナウンスするだけでもよい。文化庁の補助金も制度がよくかわって体系的に整理して説明することが難しいが、こういったものがあると住民に伝えていければ地域での取組みが活性化するのではないか。

座長：今の視点が重要。文化財課が全部背負っても難しいし、できない。関係部署が、ある地域をいろいろな角度から盛上げるにはどうしたらよいかとわからないと難しい。焼津市の計画をみたが、海と山で分けて、なんとなくうまくまとまっている。静岡市ではそう簡単には難しい。ピックアップ重点区域として考えるということでないともとまらないと思う。三保センターもそういった面からの地域活動を組み立てるという発想をもっていかないとうまくいかない。

中村：文化財の本、これを見ても、なかなか読みづらいと思う。子ども版だったら漫画にするなど、夢のある作り方も必要。デジタル化本を読まない。そういうところにも移行するとみなさんに伝える方法。いかに伝えるかが主。つくるのは専門の人が作れば良いが、地図があって、観光的な要素を含めることで、建物、史跡をみなさんに知らしめる方法を考えることができると思う。できあがった段階でどうするかということになると思うが、今風なやり方が大きな要素と思う。

田宮：区域化するとやりやすいというのはそうだが、蒲原は地区がまとまっていてそういう傾向が強い。港でも、民間が船を呼ぼうということで、年間で100隻位来る。港を活性化しようということで、ドリームプラザ、防波堤もできて、色を統一して外国船が来たり、海から見るときれいにみえる。そういうのを利用して、港の文化を広げていくのはやりやすい。三保も含めた清水の地区は、これから進めていくのは良いと思う。ただ、ここだけに集中すると偏ってしまう。並行するのか、時間ずらすかというのはあるが。

松下：計画をつくっても、文化財に関わりのない人は計画を見たりすることはあまりないと思う。文化財を知ってもらい、楽しんでもらうというのであれば、アーティストとコラボしたり、食と絡めたりというように身近なものにする必要がある。169頁に図が示されており、行政では文化財課と歴史文化課が主体となっているが、観光・MICE推進課などとの連携が重要ではないか。経済局との連携もとても重要だと思う。関係部局との連携と記載するだけではなく、具体的にどのように連携していくのかに留意してもらえるとありがたい。

座長：いろいろなご意見をいただき結論はでないが、事務局として参考にしていただき担当も楽しんで取り組んでもらいたい。

4 閉会

事務局：ありがとうございました。本日もいろいろなご意見をいただき、計画に反映していきたい。次回は5月頃を予定している。以上で終了いたします。ありがとうございました。

以上